

追跡ルポ番組「助かった命が、なぜ…」を見て

先日、「助かった命が、なぜ…」被災者が相次いで自殺 深まる謎と意外な実態」と題する追跡ルポ番組があった。

被災地域で6～9月で少なくとも38名の方が自殺しているとか。

その背景を追跡しても謎が深まり意外な実態が浮かび上がってきたよう。

過去の震災後は孤独故が問題になったが、今回の災害後は、「家族も助かっていたにも拘わらず…」が「意外な実態」ということのように。

番組の事例のある男性は、震災後帰郷した息子と仕事の再建に取り組んでいたのに突然の死。

また、ある女性は、同じ集落単位で避難した仮設住宅でみんなの面倒見がよくて慕われ、息子が結婚し孫ができて楽しみもあったはずの突然の死。

先の当 HP 記事「大震災後8ヶ月立っても、心の内にも大きな余震が…」で触れたが、災害後時間が立ったら立って質の異なる心の余震があるのでないだろうか。

「落ち着いてきて普通に暮らしているのに、なぜか、どこか壊れているように感じます。どこが？と聞かれても…？」とあるように、本人自身も自分の心の内を言葉で表せないような心境の時期があるのでないだろうか。

推察すれば、「生活が少しずつ落ち着いてきて普通に暮らしている」と思っても、その日常生活の背景は震災前とは何もかも変わっているだけに、その生活環境、条件に適應することに、やはり心の底では大きな戸惑いと疲れが織り重なっているのではないだろうか。また、見慣れた地域の景色そのものがなくなっており、そうした景色を毎日目にする度に喪失感も襲ってくるのではないだろうか。

更に、津波で流される人を一人も助けることの出来なかった懺悔感、痛恨感、無力感、等々も織り重なっていたのではないだろうか。恐らく、ご自身でも言葉で説明つかない心境かと思う。

あれこれ推測するに、具体的な何かで死に追い込まれるというよりは、日々の自らの気持ちの持ちように自らが疲れて何もかもが煩わしくなり、そんな気持ちの自分から一瞬逃れたくなりふと死をイメージして行動した結果が「自殺」ということになったのではないだろうか。

自殺された方の心境が解る由もないが、話すには言葉が必要で、言葉は自らの頭の中を整理する道具でもあるので、やはり周りは傾聴する機会を増やし、被災者自身が自らの頭や心のモヤモヤ、モンモンを言葉に現すお手伝いをするところこそ大事な気がするのだが…。